

私の青春総括

―満州から中国縦断

六千余キロ、復員まで―

東京都 藤岡 滋之助

戦後六十年を迎えて戦友諸氏も傘寿を過ぎ、その間多くの人々が不帰の人となり、数々の思い出が走馬灯のごとく浮かぶ今日この頃です。私達の年代は昭和の激動期を味わい波乱に満ちた人生を共有したことを誇りに思うと同時に、よくぞ今日まで生を受けたことに、感慨無量の思いがします。

去る六月下旬、同期の戦友で平和祈念事業特別基金の関連事業に、香川県の世話人として活躍さ

れている井原九八さんが上京、在京の戦友と三人で食事をした際、表題『平和の礎』に寄稿の誘いを受け、所属した部隊に関連した文集と「軍隊手牒」の履歴等を参考にして記憶をたどりながら筆を取りました。

私の本籍は愛媛県伊予市、大正十一（一九二二）年神戸市で生れ、現在は東京都杉並区で妻と次男、その孫と住んでおります。

楠木正成を祀る湊川神社縁の楠小学校から神戸市立第一神港商業学校に入学、昭和十三年三月、父親の仕事の都合で東京に移住、東京市立商業学校に転校（戦後の同窓会で、二期後輩に村山富市元首相の在籍を知る）、昭和十五年三月同校卒業、海外雄飛を志し、南満州鉄道(株)に入社しました。

渡満した時、大連港にて本社出向社員より大連埠頭局勤務の辞令を受け、経理課主計係に配属され、同時に前年に編成された満鉄青年隊に入り朝日隊舎に入寮しました。現場勤務の人達を含め約百五十人との共同生活は豪快な思い出が数々ありました。

中国語（北京官話）の講習も約三カ月受け、片言での満人との付合も楽しく、また先輩に囲まれた勤務も順調でした。しかし八月中頃、寮に伝染病患者（腸チフス）が発生し、それに感染して大連病院に約一カ月入院しました。その時思うところあり、退院後上司で親代りの山下熊二係長に相談して、進学を決意し、その準備に入るため昭和十六年三月退社、多数の先輩同僚に見送られて帰国しました。

付記 「満鉄不倒会」

戦後の昭和五十一年四月、満鉄埠頭局経理課を中心に「埠頭局」にちなんで「満鉄不倒会」が結成され、一年余りの勤務でしたが最年少の私も仲

間に入れて頂きました。当初七十五人の会員でしたが、現在も親交を続けており、現存の会員は十人足らずになりました。

昭和十六年四月、私立巢鴨高等商業学校（現千葉商科大学）二部に入學、同期百七人中朝鮮、台湾、中国籍の方が十三人おり、当時は五族協和を宣伝されていましたが、我々は和氣藹々とした共学でした。

昭和十六年十二月八日、生涯忘れ得ぬ太平洋戦争が勃発、真珠湾攻撃を皮切りに米英に宣戦布告し、一日中、大本営発表に国民挙げて興奮の坩堝くわこと化した状況が今も生々しく思い起こされます。

戦況は日々烈しく、戦線も拡大一途をたどる中、兵役を延期した私にとっては肩身が狭く、たまたま海軍予備学生募集の学内掲示を見て志願しました。最後の夏休みを利用して友人と九州、四国方面を旅行中、実家より受験日の通知が来た旨を受け帰京、八月某日、東京越中島の東京高等商船学校に出頭しました。幸か不幸か不合格となりました

たが戦後、合格した人達の大半が死亡したことを知り、運命の別れを痛切に感じました。

学徒動員令により昭和十八年九月繰り上げ卒業となり、友人等が次々と応召されるも私には知らせがなく、昭和十九年を迎えました。二月に入りやつと召集令状が届き、三月一日、広島野砲兵第五連隊に入営することになりました。母親と末弟の三人で伊勢神宮に参拝、本籍地の愛媛県伊予に赴き、先祖の墓に詣で、高浜港より船便で広島に渡る途中、戦艦「武蔵」の威容に接しました。

令状には防空兵との記載があり奇異に感じましたが、入営後、夏衣袴を支給され、南方行きかと思っていたところ、数日を経て冬衣袴に衣替え、十二日広島を出発、博多港から釜山、朝鮮半島を北上し、十七日に満州牡丹江に到着、広野の中にあった閑散とした営舎に入りました。この駐屯地が関東軍で編成された唯一の機甲師団、戦車第一師団防空隊で、本隊は既に北支の戦場に赴いているとのことでした。

砲で昼夜を分けて砲撃、防空隊は近辺に布陣して米軍機の攻撃に対し援護の任に当たりました。五月下旬洛陽陥落、直ちに城内に入りましたが、死屍累々の惨状を目の当りし、胸をしめつけられる思いがしました。

七月二十四日、黄河南岸を出発、旭集団長の隸下に入り京漢作戦に参加、さしたる戦闘もなく一路南下、八月二日、揚子江岸の漢口に到着、直ちに市街地にある偕行社屋上に高射機砲を分解搬入して防空警備につきました。同月二十二日漢口を出発まで米軍機の来襲もなく久し振りに平穏の日々を送りました。

— 中支の追想 —

入隊以来半年ぶりに給与（軍票）が支給され、一日外出許可を利用して、満支国境に入る前、錦州で幹候面接以来知己となった同年兵である三井、中島両甲幹が、幹部教育を受けるため南京に出向するので別離の宴を中華料理店で行い、三人で記念写真を撮りました。

教育訓練も中途半端のまま四月四日、本隊追及のため牡丹江を出発、満支国境の山海関を過ぎ、十九日に黄塵舞う河南省栄沢県花門に到着、直ちに本隊に編入され、私は第六中隊第三小队第六分隊に配属されました。

初めて見る火器は、日産六輪車搭載二〇ミリ高射機砲で、この車で終戦まで付き合うことになりました。休む間もなく黄河南岸の軍橋警備に当たり、四月二十三日から五月十日まで共産軍の湯思伯が引きいる八路軍の主力撃滅作戦に参加、同月十一日より六月十四日まで第一次、第二次洛河河畔撃滅戦、洛陽攻略戦、靈宝作戦と転戦、六月十五日より七月二十四日まで黒石関をはじめ北支各地の防空警備に当たり、七月二十四日、黄河南岸橋梁警備を最後に中支に出発しました。

— 北支の追想 —

洛陽攻略戦では城壁が高く、四周に戦車濠を掘り、地上攻撃では難攻の堅城に対して城内を見下す丘陵地に野戦重砲隊が、内地より搬入した要塞

帰還後この写真が実家に届いており、これが戦地における唯一の写真でした。三井君とは一別以来まだ面接の機会はありませんが、現在お寺の住職で、年賀状の交換が続いております。中島君は消息不明、健在であれば……。

八月二十四日、漢口を出発、揚子江を渡り対岸の武昌に着き、支那大陸縦断作戦（イ号作戦）の最後の仕上である湘桂作戦に参加しました。岳州、長沙、靈陵、全県と、機甲部隊としてひたすら敵中を突破し、墨絵の世界を思わせる奇山景勝の桂林に到着しました。そして同地の飛行場の要地防空を経て、最後の目的地広西省柳州に十一月二十七日に到着しました。

しかし部隊とは離れ、第六中隊が柳州飛行場に一番乗りとなり、直ちに陣地構築して要地防空の任につきました。

米軍機の残骸と周辺にはトーチカが散在し、ドラム缶（ほとんど空）が数百個山積みされており、共産軍、米軍航空基地にとっては重要拠点であっ

たことと思われました。戦車壕（深さ幅共に五、七メートル、長さ不明）を利用して宿舎を設営しました。何分にも敵中に孤立した状態で、糧秣、弾薬等の補給もままならず、時に微発をしたりして炊事班の方も大変苦勞をしました。

敵機 B 24、P 38 も高々度で偵察に、たまに P 61 の来襲があり、時には交戦もありましたが危惧するほどではなく、友軍の直協偵が低空で飛来しましたが、それも昭和二十年を迎える頃には来なくなりませんでした。

小康状態が続く中、牡丹江出發、戦場を往来し、私達初年兵は満足な教育を受けずここに来ています。そこで二年兵を中心に幹部より火砲の教育訓練を受け、実戦で多少の心得がありました。高速、航路角、昇降角等あらためて操作を学びました。

三月八日、臨時機関砲中隊が新設され、中隊に入隊以来の志水中隊長が補され、士官学校出身の野中中尉が中隊長となり、同時期私は中隊本部付

の負傷者。

3 歩兵部隊の渡河完了まで度々の戦闘があり、第六中隊も三人の死傷者を出しましたが、その任を終え、工兵隊が橋梁爆破、撤退。

4 余談としてその間、共産軍陣地と勘違いしたのか米軍砲兵大佐、同大尉二人が共産軍将校の運転するジープで侵入し、逮捕、憲兵隊に引渡すも、夜間逃走。

脚板州撤退は第六中隊が最後尾となり、その後七月上旬大浴口軍橋防空警備中、七月二十六日米機 P 51 数機来襲、その一機を撃墜し、これが中隊最後の戦果となりました。

全県近くまで転戦中、毎日のように飛来した米軍機の機影を見なくなり、しばらくして無線傍受で終戦を知りました。戦況も厳しく、内地の情報も広島に大型爆弾が投下されたとの噂もあり、来るべきものが来た思いで悲壮感は余りなく、今後

のこと、内地の家族の様子が心配されました。歩兵部隊は気の毒でしたが、車両にて北上、九

となりました。そして中隊長の当番をかね渡辺准尉（人事係）、伊藤曹長（庶務係）の事務手伝いを命ぜられ終戦、復員まで勤務しました。

戦闘があれば第六分隊の砲手も兼務しました。

— 南支の追想（柳州より終戦まで） —

五月二十日「イ号反転作戦」が発令され、約六カ月に及ぶ柳州要地防空の任を果たし撤退することになり、以降終戦まで第六中隊にとっては中国戦線で最も厳しい日が続きました。

— 脚板州橋梁防空警備 —

反転作戦とは名のみで、戦線悪化による後退で、この橋梁は前線より引き上げて来る友軍（歩兵）の唯一渡河拠点で、このため米軍機の爆破を防ぐため陣地構築をしました。

1 六月四日、P 51 三機来襲、第二小隊長・青木少尉が数発の直撃弾を受け壮烈な戦死。

2 六月二十一日、数百メートル先に布陣の第一中隊（高射砲）が敵機と交戦中、ナパー△弾の攻撃を受け、戦死者二十数人、多数

月長沙にて武装解除、最小限の車両と自衛のための十数丁の小銃、弾薬を与えられ岳州に着き、以降、部隊輸送に当たった本部の方々の筆舌につくし難いご苦勞により、武昌より船便にて揚子江を下り、集結地江西省湖口に中隊全員無事に到着しました。

当時共産軍と国民軍が抗日戦線で共同作戦をしておりましたが、国民軍の指導者蔣介石の過去を怨まずの一言が今後の抑留生活に大きく影響されました。

— 抑留生活から復員まで —

湖口より十余キロ奥地の劉官人村に十月十五日に入村、考えられた捕虜生活とは期待が外れ、民家の納屋等に分宿、拘束されない生活が始まりました。

日が経つにつれ住民との和合にも慣れ、農家の手伝い等をして一飯の饗応をうけたりして和気あいあいの日々でした。往復二十数キロの糧秣受領も苦痛でなく、朝夕の点呼も規律正しく行われ、

共産軍、国民軍との摩擦もなく平穏な日が続き、昭和二十一年の新年を迎え、細やかですが正月らしい酒食も出ました。

五月上旬になり、待ちに待った帰還命令が出て、半年余すごした抑留地を離れ、五月十一日、湖口に到着、遠路にも拘らず船着場まで見送りに来た村民との別れが今も眼に浮かびます。

揚子江を南京まで下り、五月十四日、下船、小休止の後、無蓋貨車で上海に向かいましたが、さすが賄賂のお国柄、途中列車が止まり、時計等の供出を要求されたりして十八日上海に到着、直ちに有刺鉄線で囲われた第六兵站到収容されました。衛生状態は最悪、食料も限りなく粗末で、ここで敗戦の惨めさをつくづく味いました。

六月二日、帰国の乗船命令が下り、埠頭で国民軍による持物検査を受け、復員船「大瑞丸」に中隊全員無事に乗船、一路故国に向いました。入隊以来一年半、中国戦線を北から南まで、機甲部隊として六千余キロ戦場を駆け回り、戦争の残酷無

被害を受けた荒廃した市街を見て、改めてこのたびの戦争が何んであったのか、憤りと悔恨の念にかられました。品川駅に到着し同行の前田欽二郎さん（中隊で唯一人衛生教育をうけた古参衛生兵で、中隊全員が世話になり、同じ東京出身の私は入隊当初より今日に至るまで親交を頂いております）と飯盒で食事をしながら駅構内に掲示されていた被災状況の地図を眺め、不安の中に家路につきました。

度重なる東京大空襲にも、幸い被害を受けなかった我が家に入り、突然の帰宅に健在であった父母弟妹（私は長男）と会い、思わず感激の涙をこぼしました。

庭にあるドラム缶にボロボロの軍衣袴等身に着けてきた物一切を入れ焼却した時には、不思議と何の感想も湧かなかったように思います。

【解説】

体験記執筆者は入隊前は満鉄に就職、大連港に

情さを目の当りに経験しました。半年余の抑留生活では住民の温みのある人間性にふれ、違和感がありました。人生で貴重な経験でした。

上海出航以来、蚕棚の船内生活は快適とは程遠い状況でしたが、天候には恵まれ、甲板に出れば追尾するイルカの群れを眺めたり、久保敏記さん（入隊前は床屋さん）が故郷に帰るのでさっぱりして行けと散髪をして貰ったりして、やがて桜島を望見した時、予期せぬ伝染病患者の発生で十日ほど、海上に止まり、六月二十三日鹿児島に上陸、駐留米軍によるDDTの粉末洗浄をうけた時、終戦後始めて無念の恥辱を痛切に感じました。

戦災のためか骨組だけになった高島屋デパートに入って小休止、翌二十四日、引揚証明書、旅費等が交付され、同ビル屋上において復員式を行い、ここに二年半有余、苦楽を共にした中隊は解散されました。

戦友各々再会を約し、夕刻超満員の列車に乗り、途中入隊時の広島に一時停車、米軍による原爆の

て埠頭局経理課主計係として勤務する。中国語を勉強、昭和十六年四月、巢鴨高等商業学校に入学、同年十二月には太平洋戦争が始まるという、当時は慌ただしい戦時下の状況にあった。学徒動員にて昭和十九年二月召集され広島野砲第五連隊に入隊する。

十二月には満州の牡丹江に到着、広野の中の兵舎に入る。これが配属された関東軍編成の機甲師団、戦車第一師団防空隊である。

本隊の戦車第一師団は中国河南省栄沢県花門にあり、四月四日、本隊追及のため牡丹江を出発、十九日に到着の上、第六中隊第三小队第六分隊に配属される。

この高射砲隊の編成は、高射砲二個中隊、高射機関砲が四個中隊の編成で、高射機関砲は二〇ミリ抵抗高射機関砲と云い、特徴は「移動警戒射撃速度著しく大にして、中空以下の敵機に迅速に行う」最新式の高射機関砲であった。人力では引けず、ほとんど関東軍の機動部隊、日産六輪車に搭

載されていた。

体験記執筆者は体験記に参加した戦闘・作戦の状況を記録しているが、当時、戦車師団の防空隊高射砲というのは、①印の着いた②歩兵という機能部隊が敵前まで車で進出、散開し、それに砲隊が接近して砲列を敷き、友軍の掩護をするという第一戦部隊の高射機関砲隊であった。その状況は五月二十五日か洛陽攻略戦の描写に詳しい。

『洛陽攻略戦では城壁が高く、四周に戦車濠を掘り、地上攻撃では難攻の堅城に対して、城内を見下す丘陵地に野戦重砲隊が内地より搬入した要塞砲で昼夜を分けて砲撃、防空隊は近辺に布陣して、米軍機の攻撃に対し援護の任に当たり』という。

この戦闘では非常に困難が伴い、多くの死者が出るという苦戦を強いられている。この洛陽攻撃も終わって、敵軍は西安方面に退却、これを追撃する作戦があったと言われているが、日本軍全体の作戦から見て、西安の方まで行くよりは、もっ

と大時な南方があるのではないかということで、西安へは途中まで追撃している。

そして支那大陸縦断作戦（イ号作戦）の最後の仕上である湘桂作戦に参加する。岳州、長沙、靈陵、全県を機甲部隊として敵中を突破し、桂林に到着する。

この湘桂作戦は、南京を通過して南下して武漢三鎮に至る作戦で、時は昭和十六年八月頃、日本の軍隊が中国に多く出動しており、高射砲隊としては約一カ月、この辺の要地防衛任務ということ、心身ともに最も休らいた時期であったと言う。

以後、中支、南支を転戦、全県付近で、それまで毎日のように飛来した米軍機の機影を見なくなり、無線傍受で終戦を知る。そして歩兵部隊とは異なり、車両で北上して、九月長沙にて武装解除となる。

入隊以来一年半、中国戦線を北から南まで、機甲部隊として六千余キロ戦場を駆け回った記録である。